

## 南無阿弥陀仏・・・八つではなれた親のため

文 中野 東禪

宝暦五年は、近世の四大飢饉の二番目にあたる年であった。その惨状さんじょうをまのあたりにし、地獄絵のような中を生きた鞭牛さまの見たものは、一体なんであつたらうか。

土用種よろずの種のみのも土用冷えれば実も入りかねて

と鞭牛さまは詠んでいる。土用の天候がおちつかないこの土地の農民の不安をうたつたのである。しかも、この年の天候は異常つづきであつた。春のおわりから初夏にかけて初茸はつたけが出た、という話があちこちにひろがった。もともと初茸は、初秋の頃から出るものである。それが初夏に出るということは、けつきよく気候が陰気で雨が降りつづくからであろう。いずれにしても、豊年の作物ではない、と人々は話しあつた。くわえて、三月の末から、米穀の値が段々と上がつてきていた。ことに六〇七月中は冷気で、田畑の生育がよくなく、雨は土用の入りの昼頃まで続いた。

俗に、土用の入りに雨が降ると、四十八日降りつづくといわれている。

けつきよく、夏の間中、はつきりしない日がつづき、土用の入りからやはり四十八日ほど雨が降りつづいた。

この頃になって、ようやく人々はあわてはじめたのであつた。

この年の麦の作柄はよく、麦作がよければ豊作だと、古老がいい伝えていたので、秋になれば“なおり作”になるだろうと、みんなであてにしていた。

ところが、けつきよくは大凶作で、古老のいい伝えもあてにはならなかつた。

そんな人々の、不安が渦まく中で、鞭牛さまは、何をなさねばならないか、ということをぼんやりと考えつづけ、手さぐりをしていた。

この年の三月に、橋野村の太田林与三郎は、鞭牛さまに隠居屋敷を寄進した。林宗寺より、ずつと里におりたところであつた。

いつの頃からか、鞭牛さまには、ひとりの弟子がいた。名を得水とくすいといつた。

五月になると、得水に衣鉢えいぼつを伝えて、林宗寺をまかせ、自分は隠居したのである。

その隠居所で、鞭牛さまは、大乘妙典一字一石血書供養をした。それは、かつて断食入定だんじきにゆうじようした秀全和尚が供養した行であった。

いま、それにつづいて鞭牛さまは、肉を切り血をしぼって『法華経』を、石に書きつづけるのであった。その妖気さえ感じられる行をつづける鞭牛さまの胸中には、人々の苦しみを代って背おい、仏の慈悲をこいねがう、ひたすらな思いがこもっていたにちがいない。

そうこうするうちに、穀物の値は上がりつづけ、人々は米穀を買いつけ、人目をさけて所持米をかくすのであった。

こうして秋を迎えた頃には、すでに、たくさえの古米は底をつき、新米の出荷もなく、金銭はあつても買う米がない状態であった。そば、大豆、大麦、小麦の類のみを食べ、それさえない者は、大根を食べて命をつなぐ……、これが飢渴きかつ人の出はじめであった。

盛岡の城下あたりでは、だんだん困窮して盗賊がふえて物騒になる。が、在の方では値付けたものを青刈りして食べるので、城下ほどではなかった。

秋になつても雨は止まず、朝日は朱あけのように赤く、日中も光がうすくて月のような日さえあった。

そして立冬をすぎるところになると、近在から盛岡の城下へ流れこむ飢渴人が激増し、藩では、城下の寄りあいや、夜間の外出を禁止した。

また、寺社や富家の門口には捨て児がふえ、はじめはあわれのあまり、それぞれがひろって育てたり、あるいは米や銭をつけて、のぞみの人にあずけたりした。しかし、のちには米ほしさに捨て児をもらい、米は自分のものにして、捨て児は川へなげする非情なにせ里親が多くなつたので、寺社や富家でも、自分のところの門口に捨てられないように用心するしまつてあった。

しまいには、飢えのあまりに、我が児を野山にすてるものさえ出てきた。

あるものは“根もち”と称して、わらびの花をとったかすを売り出し、これを食べ腹が腫れて死ぬ人が出るありさまであった。

この年の南部藩では、二十万石の収穫が皆無、人口三十六万人中、餓死者五万人、疫死者一万人、馬匹ばひは二万頭が死ぬという状態であった。

南部藩では、前年の江戸における米価高をよいことにして、藩米十万石を売りはらって、日光東照宮修理金として抛出していた。そのためにお救い小屋は、盛岡城下に数カ所だけ

設けるのにせいっぱいで、救済らしい手だては、けっきょく何もできないありさまであった。同じとき、仙台藩の一の関領では、備蓄倉をひらいて救恤きゆうじゆつにつくしたために、餓死者を出さずにすんだ。その差は、言わずとも歴然としていた。

晩秋のころ、鞭牛さまは山田町の大沢の作造鼻いわりに庵を結んだ。そこは、おそらく餓死者たちの捨て場であつたのだろう。鞭牛さまは、“南無阿弥陀仏”の小さな石碑を建て、そこでひたすらうかばれぬ死者たちを供養しつづけるのであつた。

南無阿弥陀仏申す念仏誰がため八つではなれた親のためなり

子ゆえに、食わずに死んだ親たちへの手向けであり、親を失った子たちに念仏をとなえさせる、このどうにも怒りのもっていきようのない悲しみを、じつと見つめて、共に涙している鞭牛さまの姿であつた。

(つづく)